

一宮市三岸節子記念美術館

三岸節子 〈短歌ポスト〉 入選作品 (令和七年後期分)

選者 小塩卓哉 (現代歌人協会理事)

【優秀作】

* 細い運河 *

ヴェネチアのいにしへの運河たゆたゆとキャンバスからも船歌聞こゆ

瀬戸市 宮崎 諭志

三岸節子 《細い運河》1974年 ©MIGISHI



〈評〉この絵の視点は、画家がゴンドラに乗って見えてくるものである。三岸は冬の観光客が少なくなったヴェネチアを好み、寒い中ゴンドラに乗ってスケッチを続けたと言う。オフシーズンにはゴンドラで船歌を歌う船頭の姿もないのだから、絵画を見る者には船歌が聞こえてくるようだ、という短歌なのである。「たゆたゆ」は造語の擬音語か。船頭の歌うカンツォーネの伸びやかな感じを表して秀逸である。

* 作品II *

緑蔭に壘を並べる節子さん「この青色は好太郎さん」

犬山市 有本 仁政

三岸節子 《作品II》1991年 ©MIGISHI



〈評〉一九九一年に描かれたこの絵には、ワインや洋酒のような壘が一杯並んでいる。前列には青色の壘が二つ。絵を描くに当たって、節子は構図も考えながら壘を並べたのだろうか。そして、壘を擬人化して、この壘は好太郎さん、これは誰それ、といった風に。これは絵画を見ている者の勝手な空想であるが、アトリエの外であることがまた、そんな空想にリアリティーを与えていく。

* 細い運河 *

細い運河光がさした向こうから節子さんがほらのぞいでる

末広小学校五年生 辻川 真衣

三岸節子 《細い運河》1974年 ©MIGISHI



〈評〉建物と建物の狭い間に運河は流れている。そこに天から光が差し込んでくる構図だ。この光景を見ているのは間違いなく作者の節子なのだが、この短歌の作者は、細い空間に光の差すその向こうから絵の作者がのぞいているような気配を感じ、一首に定着させた。この歌を読んでいると、本当に向こうからも、節子がこの運河をしっかりと見て、絵筆をとっているように感じられるから不思議だ。それくらい緊張がこの絵画には詰まっていよう。

【佳作】

自画像

遠くから静かに節子が見つめてるのこぎり屋根の真下の我を

稲沢市 安田 一子



三岸節子《自画像》
1925年 ©MIGISHI

坂の上へ（アンダルシア）

スカートをはるがへしつっ駆け上る幼き吾は扉をくぐる

一宮市 伊藤 文栄



三岸節子
《坂の上へ（アンダルシア）》
1987年 ©MIGISHI

もや

キャンバスに立ちのぼるもやメラメラと画家に生きたる節子の決意

岩倉市 山本 昭秀



三岸節子《もや》
1937年 ©MIGISHI

自画像

ほの紅あかき口くちびる閉じて自画像の節子真直まっすぐに吾を見すゑし

瀬戸市 水谷 美智代



三岸節子《自画像》
1925年 ©MIGISHI

花

でこぼこのマチエールに節子の覚悟見る細かい事に囚われし吾

名古屋市 畠山 美智代



三岸節子《花》
1950年代
©MIGISHI



三岸節子《花》
1951年頃
©MIGISHI

白い花（ヴェロンにて）

うつむきて私に何か語りくる円まるき大きな白い花たば

北名古屋市 濱田 静江



三岸節子
《白い花（ヴェロンにて）》
1989年 ©MIGISHI

雲と海の対話（嵐）

暑い夏キャンバス向かうあなたの目同じ景色を今感じて

愛知淑徳大学二年生 三浦 華音



三岸節子
《雲と海の対話（嵐）》
1975年 ©MIGISHI